

子どもの心に生きる同和教育

—— 一人一人の心のつぶやきを感じ取れる教師 ——

足利市立大橋小学校

I 研究主題について

1 基本的な考え方

同和教育は、部落差別の解消を目指した人権尊重の教育である。しかし、依然として差別や偏見が解消されていない現状を考えると、教師自らの課題として部落差別を受け止め、積極的に取り組まなければならない責務であると認識している。本校では、学校における同和教育を学校教育改善の重要な視点としてとらえ、地域や子どもの実態を踏まえながら、差別のない人間関係の育成を目指して、計画的・組織的に推進することが大切であると受け止めた。

子ども達の日常生活から生じる様々な不安や悩みは、なかなか表面に出にくいものである。特に、同和問題についての不安や悩みは、計り知れないほど大きいものである。本校では、教師の姿勢として、教師自身が豊かな人権感覚を養い、同和問題に対する認識を深めながら、子ども達との間に信頼関係を築くことが大切であると考えた。そして、その信頼関係を基盤にして、子ども達の心のつぶやきを感じ取れる教師を目指すことにした。

2 研究主題設定の理由

本校は、県立図書館や市総合運動場等、体育・文化の振興にかかわる多くの公共施設に囲まれており、休日や放課後には、それらを利用している子ども達も多い。また、本校は、市内で唯一の情緒障害学級を併設した学校であり、日頃、特殊学級と普通学級との交流が自然な形でなされている。子ども達同士、育った環境をもって生まれた障害を事実として受け止め、思いやりの気持ちをもって生活している。このように障害のあるものや親しい友達に対しては、優しい言葉を掛けたり手を差し延べることができるが、そうでない友達に対しては、その場の状況に応じた正しい判断や望ましい言動に欠けたりする面も見られる。

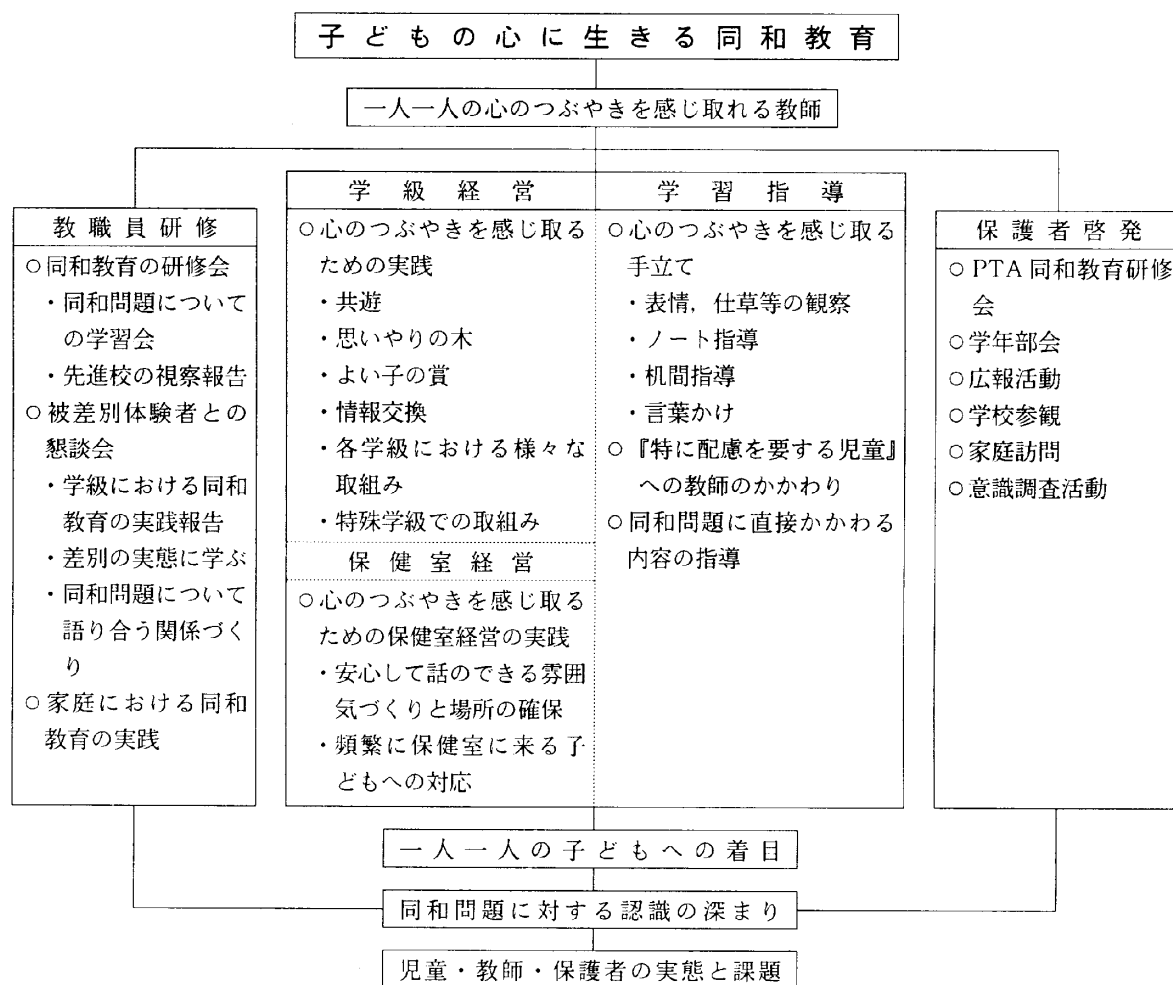
また、子ども達の中には、思うように自分の力が発揮できずに、学習に対して不安をもっていたり、それが原因で、友達とうまくかかわれないような子どもも見られる。

一方、保護者や地域の人たちは、学校教育がより良い子どもの育成を目指して取り組んでいることについては理解を示してくれているものの、子ども達の様々な不安や悩みについて考え、協力して問題解決にあたるまでには至っていない。

このような子ども達や保護者の実情から、今後一層、不合理な差別や偏見をなくすことを教師自身の課題として、その解消のために努力していかねばならないと強く受け止めている。子どもの立場に限りなく近づき、その心のつぶやきを感じ取るために努力する教師の姿は、子ども達の現在の諸問題や、将来、社会生活を営む上で、様々な困難や問題に直面した際にも、不安や悩みを乗り越え、たくましく生きる力を育てていくものと確信している。このような考えに基づき、「子どもの心に生きる同和教育」という研究主題を設定した。また、教師が、学校生活全般において、子どもの目の高さで物を見たり考えたりするようにし、声にならない心の中の不安や悩み（心のつぶやき）を感じ取る努力をすることによって、相互の信頼関係が深まるものと考えている。教師と子どもの信頼関係が深まれば深まるほどに、教師は子どもが誰にも言えないような悩みを聞くことができたり、あるいは、悩みを察知することができたりし、ひいては、足利市の学校同和教育の当面の課題である「教師が児童生徒と同和問題について語り合う関係づくり」を目差すことにつながると考えた。このような教師を目指して、副主題として、「一人一人の心のつぶやきを感じ取れる教師」を設定した。

II 研究推進構想

〈推進構想図〉



III 研究推進の基本方針

研究推進に当たっては、先進校の実践に学び、「教育の本質にかかわるもの」と「教師の同和問題の認識の深まりにかかわるもの」の二つの柱を基本にすえて、同和問題の解決に確かな展望をもち、「みんなで、ていねいに、一步一步」を基本に研究実践を重ねていくことにした。

「教育の本質にかかわるもの」では、学習指導場面と学級経営場面の相互について研究を進めていくことにした。学習指導や学級経営においては、子ども達の心をつぶやきを感じ取り、支援することが大切であると考えた。さらに、学習内容が理解できずに不安を感じている子、交友関係で悩んでいたりする子などの配慮を要する児童をより早く察知し、声にならない心をつぶやきを感じ取ることが大切であると考えた。

「教師の同和問題の認識の深まりにかかわるもの」では、教職員研修を重視して研究を進めることにした。同和教育を実践するには、一人一人の教師が、差別の不合理さや偏見に対して正しく認識する必要があると、同和教育の必要性を痛切に感じる大切であると考えたからである。さらに、保護者の実態や地域の実情を十分に把握し、保護者啓発をしながら研究を進めていくことにした。保護者啓発では、教師が、保護者とともに同和教育や同和問題について正しい理解と認識を深めながら相互の信頼関係を築く中で、一体となって同和教育に取り組むことが大切であると考えている。子ども達ばかりでなく、同和教育や同和問題に不安や悩みを感じている保護者の心をつぶやきを感じ取り、その信頼関係を深める中で同和問題について語り合える関係にまで発展させたい。

IV 研究の実践

1 同和問題に対する認識の深まりについて

(1) 教職員研修

教職員自身が、同和問題解消を自らの課題として受け止め、研修、話し合い、実践を行う中で人権感覚を磨く。



ア 同和教育の研修会

毎週火曜日、朝の打合せに替え、資料を用いて、説明会、報告会を行い、全職員そろって研修を深める。短く説明、報告できるものについては、火曜日の朝に限らず、必要に応じて随時行う。同和問題及び同和教育に関する基本的な事柄の説明、同和教育の出張報告、同和問題及び同和教育に関する書籍の輪読、解放新聞の紹介、足利市学校同和教育推進の方策の輪読等を研修する。

〈実践から〉

教職員一人一人が、同和問題及び同和教育に関して、研修する意義や歴史的背景、行政での取組み方、人権等について認識し、理解を深めてきた。また、人権や差別といったことに対して敏感になり、子どもへの言葉かけに気を付けたり、子どもの中の差別を見抜く目が養われてきた。

イ 被差別体験者との懇談会

被差別体験者を講師として依頼し、7年度は地域福祉会館で、8年度は大橋小学校を会場に実施した。

全体会で、本校の同和教育の取組みについての説明をし、更に話し合いを深めるために、少人数による分科会に分かれた。分科会で、被差別体験者から差別の実態を聞き、学校で行っている同和教育や実社会における同和問題について話し合った。

〈実践から〉

差別のことについては、書物で知ることが多かったが、差別の実態を被差別体験者の生の声で聞くことにより、改めて、差別の厳しきや、その不合理性に気付くとともに、差別に立ち向かった人々の強さにも感動を覚えた。また、被差別体験者の学校教育への願いを直接に聞き、教師に求められているものが何であるかが分かるようになった。

ウ 家庭での同和教育実践

ビデオ視聴（「足利市生涯学習課社会教育係の視聴覚ライブラリー同和教育に関するリスト」を配布するとともに、申請書、報告者の用紙を渡し、夏休みに自由に利用）や、同和問題・同和教育についての話し合い、説明、輪読会、または、その組合せ等、その方法は自由とした。

〈実践から〉

教職員一人一人が、自分なりの方法で、身近な人に同和問題を投げかけることができた。また、身近な人々の中にも、同和問題について正しく理解していなかったり、心理的な差別や偏見をもつ人がいることを知った。

(2) 保護者啓発

適切な内容と機会を考慮した啓発活動を行うことにより、保護者の心のつぶやきの把握に努め、共に学

びながら、同和問題について語り合う関係づくりを目指す。

ア PTA 同和教育研修会

保護者対象の同和教育・同和問題に関する意識調査（第1回目）の結果を見て、さらに正しい理解をしてもらおうと、全保護者を対象にした研修会を実施した。

（研修内容）

- ・ 同和問題とは何か？
- ・ 学校は、なぜ同和教育を必要としているのか？
- ・ 本校が取り組んでいる同和教育は？

（保護者の感想）

- ・ 小学校のうちから、偏見や差別の不当性について少しずつ教えてほしい。自分達（40代）が小学生だった頃は、同和問題については全然知らなかった。
- ・ 改めて差別について考えさせられた。個々の大人が、差別に対して本気で考えられたらと思う。基本的人権が尊重された幸福な社会にしたいものだ。

〈実践から〉

用意した椅子が不足するほどの参集ぶりで、関心・期待の高さを感じられた。同和教育を十分に受けてはいない世代の保護者が多いせいもあり、自ら学ぼうとする意識がうかがえた。保護者の熱心な姿に、教師も応えるべく日々の努力をしなければと思った。

イ 学年部会

同和教育に関して、日頃どのようなことを心掛けて学級経営や学習指導をしているかについて、説明をした。

（概要）

- ・ 講話……本校の同和教育に関する講話の後、質疑応答の時間を設けて、話し合う。
- ・ 映画鑑賞……同和教育に関する映画鑑賞後、感想を発表した。それを基にして、各ブロック・学年の実態を踏まえた子ども達の現状を報告したり情報交換をしたりする。
- ・ 座談会……本校の同和教育に視点を当てた子ども達の様子を報告したり、保護者同士の話し合いをしたりする。

（ローテーション表）

ブ ロ ッ ク	1 学 期		2 学 期		3 学 期	
	期 日	内 容	期 日	内 容	期 日	内 容
低 ・ 特	7/5 (金)	講 話	12/2 (月)	座 談 会	2/25 (火)	映 画 鑑 賞
中	7/2 (火)	映 画 鑑 賞	12/5 (木)	講 話	2/27 (木)	座 談 会
高	7/3 (水)	座 談 会	12/6 (金)	映 画 鑑 賞	2/28 (金)	講 話

〈実践から〉

8年度の1学期の保護者啓発活動では、どのブロックにおいても、数人の感想が聞けた程度で、話し合いの深まりがあまりなかった。差別があるという実態を、まだ、身近な問題として感じていない保護者が多いようだ。教師自身も、自己研修や教職員研修を通じて、保護者の声の背景にあるものを感じ取り、今後も啓発活動をしていかなければならないと感じた。

ウ 広 報 紙

年1回発行の学校新聞「おおはし」では、研究の骨子に関する同和教育のとらえ方や考え方を伝え、毎月発行の「学年だより」等では、より具体的な例を掲載して、保護者への同和教育についての投げか

けをしている。

〈実践から〉

難しい言葉を羅列した記事を繰り返して掲載するよりも、どんなことが同和教育なのかを身近な例を挙げて知らせた方が、保護者の理解と協力を求めるには有効であるようだ。毎月発行される「学年だより」や「保健室だより」の「同和教育コーナー」を楽しみにしている保護者も多く、関心も高い。

エ 学校参観

PTA総会や地区各種団体役員との懇談会では、本校の学校教育目標・学校経営方針、同和教育への取り組みについての説明をし、保護者や地域の方々の理解と協力を願った。また、年3回の授業参観では、授業実践を通して、同和教育についての理解を深めている。

〈実践から〉

保護者の同和教育に対する感想や意見を分析すると、積極派、消極派、そして、よく分からないという3つに大別できる。授業については、教師の取り組み姿勢や教師と子どもが親密に取り組む様子が、授業を見ている保護者にも伝わっていると思われるアンケートの感想が多かった。

オ 家庭訪問

本校の同和教育への取り組みを保護者一人一人に説明し、そこで得られた保護者からの声を参考にし、今後の研究の糧としている。また、同和教育・同和問題に関して、保護者の心の中にある不安・疑問等を感じ取り、解決に向けて語り合う関係を目指している。本音で語り合える場面として重要視している。

〈実践から〉

家庭訪問の折、本校の同和教育の取り組みについて話し合った。7年度は、ほとんど聞き役であった保護者が、8年度は、事前に話合いの材料を提供したこともあってか、身近な問題について、教師に質問するようになってきた。その中から、保護者がどんな不安や悩みをもっているのかが分かり参考になった。保護者が、同和教育を身近なものとしてとらえるようになってきたことを実感できた。また、短時間ゆえ、効率的な啓発活動をするためには、教師自身も研究をする必要に迫られた。これが、教師にとって自己啓発のよい機会ともなった。

カ 意識調査活動

同和教育の推進上、同和教育や同和問題に関して、保護者の意識の実態を把握しておくことは、重要なことである。学校と家庭が正しい認識の下に、同和教育は行われなければならない。意識調査活動は、保護者の声をつかむために必要であるだけでなく、得られた声をもとにして、次の投げかけをするためにも必要である。

〈実践から〉

平成7年度から8年度にかけて2回の意識調査を行った。正しい認識をもつ保護者が増加傾向にあるが、これは、研修会の開催による効果があったものと思われる。ただし、いまだに同和地区の起源について「人種（民族）が違う」という回答が1割前後もあったので、誤った知識をもっている保護者への啓発方法を、随時、検討しているところである。また、研修会に参加しない（できない）保護者に対する啓発の工夫も考えていく必要がある。

2 教育の本質にかかわる内容について

(1) 学級経営場面での取り組み

研究副主題である「一人一人の心のつぶやきを感じ取れる教師」とは、学校教育活動全体を通して、子どもをしっかりと見つけ、かかわりを深め、子どもが発するいろいろなつぶやきを感じ取れる教師である。

そのような教師になることで、一人一人の子どもが温かく包まれ、支えられ、そして、誰もが生き生きと活動できる学級となる。教師は、一人一人に着目し、その多様性を認識し、よさを伸ばすことによって、お互いの信頼関係を築き、より多くの心のつばやきを感じ取れるようになると思う。

ア 共遊

どの学級の中にも、よい人間関係が作りにくい子ども、何事にも消極的な子ども、元気がない子ども等、教師にとって常に気になる子どもの存在がある。そのような子どもの背景を読み取るために、教師自ら、子どもの遊びの中に加わることは、極めて有効な方法である。遊びの中で観察したり、語りかけたりする機会をつくることによって、普段の生活では見えにくい子どもの側面や交友関係が見えてくるからである。



〈実践から〉

教師の多くは、週に2、3回程度、時間・場所・内容・ルール等を子ども達に決めさせ、体育館や校庭で学級全員と遊ぶことに努めている。時間等を設定せずに、子ども達が遊んでいるところへ、教師が自由に入って行く方法を取っている学級もある。鬼ごっこ・ボール運動・陸上運動が主な遊びである。共遊の時間をとても楽しみにしている子どもも多い。回数を重ねるごとに、子どもとの信頼関係が深まり、どの教師も子ども達の様々なつばやきを感じ取ることができるようになってきた。

イ 思いやりの木

教師の姿勢が、いつも子どもを温かく包み、支えようとするものであれば、子ども同士は、互いに相手の立場を考え、他を思いやる心も育ち、共に生きようとする学級集団が生まれ、教師もより多くの子どものかかわりを持ち、つばやきを感じ取ることができるようになる。子ども同士が、思いやりのある行為を感じ取って、葉や花の型の中にそれを記述し、それを枝に飾り付け、木の葉を増やし花を咲かせる。感謝する側も、される側も、互いのよさを認め合うことになり、これを学級という大きな木に、成長させたいと考えた。

〈実践から〉

「思いやりの木」によって、自分のことしか見えなかった子どもも、周りの友達の様子に関心をもつようになってきている。人前で思っていることが言えなかった子どもも、「思いやりの木」を通して、その思いを形に表すことができるようになってきており、教師も、子ども同士の人間関係や児童理解に役立て、今までとらえることができなかった新たな心のつばやきを感じ取れるようになってきた。

ウ よい子の賞

子どもの善行や努力を賞賛し、毎月表彰している。1年間にだれもが1度は受賞できるようにしている。子どもをみる目が深まる程に、教師には、子どものよさがよく見えてくる。心の中の不安や悩み、言葉にならない心のつばやきを感じ取るためにも、このよい子の賞を活用している。

〈実践から〉

「よい子の賞」によって、教師は、子ども達から多くのつばやきを感じ取ることができた。子どものよさを見つけようと、子どもに対し多くのかかわりをもつことに努め、心のつばやきを感じ取るとともに、普段では見られない子どもの姿や実態をつかむことができるようになり、更に違った見方でかかわりを

もつことができるようになった。そして、また新たなつぶやきを感じ取ることができるようになった。

エ 情報交換

土曜日の下校後を情報交換の時間に充て、担任の直接わからない時間（出授業、休み時間、清掃等）で、他の教職員が気付いたこと、感じたこと、見聞きしたことなどをその子どもの担任に伝えている。

〈実践から〉

情報交換の時間を確保することで、一人一人の子どもをより深く見つめようとする教師の姿勢が培われるようになってきており、教師の心構えや意識も変わってきた。同時に、一人一人の子どもに対して、全教職員が共通理解の基に、学校生活のあらゆる場面に接していくことができるようになり、子どものつぶやきを感じ取る上でも役に立っている。

オ 各学級における様々な取組み

「共遊」「思いやりの木」「よい子の賞」「情報交換」については、全クラス共通した取組みだが、この外にも、各学級では、心のつぶやきを感じ取るために様々な取組みをしている。いくつもの学級で同じような取組みをしているものもあれば、学級独自のものもある。

〈実践から〉

（例）日記

必要に応じて適度な指導は入れていくが、あまり指導が濃くなり過ぎて、子ども達の不安や悩みがとらえにくくならないよう、留意しながら実践している。教師は、子どもの書いた日記に対して認めたり励ましたりする。こうして、学習に対する不安や悩み、交友関係での悩み、家族のことなど、内容が多種多様にわたり、本音（心のつぶやき）を感じ取れるようになってきた。

カ 特殊学級における取組み

クラスの子供達は、喜怒哀楽を表現しにくく、子ども同士でコミュニケーションをとることは難しい。なかなか思ったことを言えない。表現できにくい子ども達であるから、教師は、「○○して欲しい。」「○○したい。」という子どもの願いを、主に子ども達の言葉にならない表現や仕草から感じ取ろうとしている。そのために、共遊や交流学习、散歩や特殊学級体験指導等の場面で、より多くの言葉かけをしながら、子ども達の心のつぶやきを感じ取ることに努めている。

〈実践から〉

休み時間には、校庭を走る、遊具で遊ぶ、うさぎの世話や花壇の手入れといった、主に3つの活動に分かれ、それぞれの子供に合った遊びを教師と共にしている。言葉を発することの少ない子ども達であるが、疲れた、ブランコに乗りたい、喉が乾いた等のサインを顔の表情や仕草に表し、教師に伝えようとしている。遊びを共にすることで、スキンシップの機会も増え、喜びとともに、子どもの不安や不満といった、子どもの心の中から発するつぶやきが、少しずつ聞き取れるようになってきた。

(2) 保健室経営での取組み

ア 安心して話のできる雰囲気づくりと場所の確保

保健室は、怪我の手当てや病気の手当てをする場所であると同時に、子どもにとって指導されるというイメージのない心のケアをする場所である。また、周りの友達や担任を意識することなく、話のできる場所でもある。そういったリラックスした雰囲気の中で、何気ない話もしばしば出る。その会話のもとに、様々なかかわりをする中で、子どもの不安や悩みを感じ取れるように努めたい。

イ 頻繁に保健室にくる子どもへの対応

頻繁に保健室に来る子どもについては、手当てをしたり、症状を聞きながら、できるだけ多くの対話を

するようにしている。また、話をしながら子どもの表情や仕草、目の動きなどを見たりすることで、子どもの不安や悩みなどを感じ取るように努めている。また、その子の置かれている家庭環境、友達関係などを聞いたり、担任との情報交換をしたりすることによっても、頻繁に来る理由を考えてみる。

このように、様々な手立てで、子どもの不安や悩みなど、他人にはなかなか言えないようなことでも、子ども達のつぶやきを感じ取れる教師を目指している。

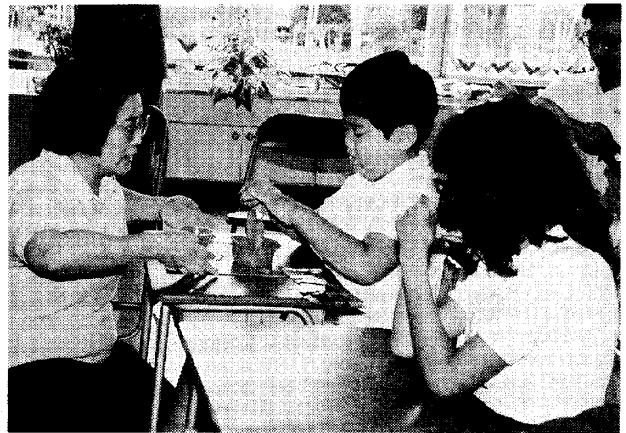
(3) 学習指導場面での取組み

本校では、全教科・全領域において「一人一人の心をつぶやきを感じ取ること」に取り組んでいるが、学習指導場面では、表情、仕草等の観察、机間指導、言葉かけ等の場面を通して子ども達にかかわり、学習のつまずきによる不安や人間関係から生ずる悩みなどの心をつぶやきを感じ取るように努めている。

ア 心をつぶやきを感じ取る手立て

・ 表情や仕草等の観察

授業展開のあらゆる場面で、表情や仕草等を観察することにより、学習に対する意欲や学ぶ喜び、学習のつまずきによる不安や人間関係から生じる悩みなどを感じ取る。



・ ノート指導

ノートの記録を観察することにより、学習への取組みを感じ取る。また、学習についての感想、疑問、意見等からその背景にある心をつぶやきを感じ取る。

・ 机間指導

授業中、子どもと一対一のかかわりをもちながら、表情、仕草等を観察することにより、一人一人の心をつぶやきを更に深く感じ取る。

・ 言葉かけ

グループ学習や個別学習時に机間指導を行い、褒め言葉や励ましの言葉などをかけた時の子どもの様子から心をつぶやきを感じ取る。

イ 「特に配慮を要する児童」への教師のかかわり

「特に配慮を要する児童」とは、広く考えれば、子ども達全員ということになるが、教科指導においては、「学習に遅れがちな児童」、児童指導においては、「問題行動のある児童」ととらえがちである。しかし、本校においては、「同和問題に関し、内面の矛盾に悩む児童」という最も重要なとらえ方をはじめとして、「様々な不安や悩みをもつ児童」「人権が阻害されている児童」「今、教師が見なくてはならない児童」ととらえている。

学習指導では、教科や単元の中で「特に配慮を要する児童」の心をつぶやきを感じ取るために、「何のために、どのようにして、何を確かみたいのか」という観点を具体的に定めることにする。また、指導案の展開に「特に配慮を要する児童への教師のかかわり」の欄を設け、心をつぶやきを感じ取る手立てを具体的に明記し、実践する。

ウ 社会科における同和問題に直接かかわる内容の指導について

本校では、同和問題に直接かかわる内容を指導するに当たり、「一人一人の心をつぶやきを感じ取り、

同和問題に関する不安や悩みをもつ児童や、将来、不安や悩みをもつかもしいない児童をいち早く察知し、自信や希望をもたせる指導のできる教師」を目指し、思索と実践をしている。

また、同和問題に直接かかわる内容を扱う場合は、教師の同和問題に対する認識の深まりに応じて、その扱い方に大きな差がでてきてしまい、場合によっては、差別の再生産につながってしまう危険性もあるので、教師自身の研修をより深め、自己啓発に努めなければならない。

さらに、教師は、被差別部落の人々が、あらゆる差別を憎み、人が人を差別をすることがない世の中の実現を願って、人権獲得のために先頭に立って努力してきた人々であることをしっかり認識するとともに、被差別体験者の立場に立った授業展開をする必要がある。具体的には、次のような点に留意して進めていく。

〈同和問題に直接かかわる内容の指導での留意事項〉

- (ア) 被差別部落の人々が、社会に役立つ仕事を通して社会全体を支えたこと、また、差別解消と人権獲得のために先頭に立って努力してきた面を共感的に理解させるように努める。
- (イ) 日本国憲法における基本的人権を学習する場面で、部落差別問題の解消は、国民一人一人の責任においてなされなければならない国民的課題であることを理解させ、差別解消に向けて積極的に努力する資質を養う。
- (ウ) 授業に当たっては、絶えず一人一人の子どもの反応を発言・表情等から確かめながら展開し、心のつぶやきを感じ取れるようにできる限りの努力をし、必要に応じて事後指導をする。
- (エ) 指導内容について、短絡的な部落差別に結び付けた言動がみられた場合には、職員間で連絡を密にし、早急に適切な指導をする。
- (オ) 学校同和教育における「同和問題に直接かかわる内容の指導」においても、日常指導における子どもとの信頼関係づくりが基本となることを認識する。

V 研究の成果と今後の課題

2年間の研究を通して、全職員が本校の研究主題「子どもの心に生きる同和教育」を自らの課題としてとらえ、原点にかえって、研究実践を積み重ねてきたことが大きな成果であった。

「教育の本質にかかわる内容の指導」において、学校生活全般を通して子ども達にかかわり、子どもの事実を見つめようとしてきた。そして、学級経営と学習指導の関連の中、子どもの心のつぶやきを感じ取る実践を積み重ねてきた。その中で、子どもの目の高さでかかわることや、その子の身になって共感し、不安や悩み、願いや希望を聴く努力をすることが、言葉にならない「心のつぶやき」を感じ取る手立てであると、気付くことができた。

また、「同和問題に対する認識の深まり」では、差別を受けた方々の生の体験を聞くことができ、部落差別の不合理性と同和教育の必要性を改めて認識することができた。そして、数々の教職員研修を通して日常の教育活動を見直すこととなり、同和問題の解決に果たす教職員の役割の重要性を深く再認識し、人権問題としての部落差別解消を自らの課題として受け止めることができた。

今後は、常に初心を忘れることなく研究を深めることから、「一人一人の心のつぶやきを感じ取れる教師」を目指して研鑽を積んでいきたい。そして、子ども達はもちろんのこと、保護者の「心のつぶやき」を感じ取ることにも努めていくことによって、相互の信頼関係を一層深め、同和問題について語り合える関係になるよう「みんなで、ていねいに、一步一步」実践を積み重ねていきたい。

評

学校における同和教育の推進においては、同和問題に関し内面の矛盾に悩む児童生徒をはじめ、様々な不安や悩みをもつ児童生徒の心をいち早く察知し、その悩みについて語り合えるような指導態勢を確立することが大切です。

大橋小学校では、心のつぶやきを感じ取るために努力する教師の姿、子供と感じ取った心のつぶやきについて語り合う教師の姿が、いつまでも子供の心に生き続けるという考えから、研究主題「子どもの心に生きる同和教育」、副主題「一人一人の心のつぶやきを感じ取れる教師」を設定されました。

そして、子どもの不安や悩みをいち早く察知することを研究の中心に据え、声にならない心の中の不安や悩み（心のつぶやき）を感じ取るために、次の点に努力をされました。

(1) 学習指導においては、表情や仕草の観察、ノート指導、机間指導、言葉かけなどの実践を、学級経営においては、共遊、思いやりの木、よい子の賞、日常での情報交換、日記などの各学級での創意をこらした様々な実践を通して、心のつぶやきを感じ取ることに努めました。

また、特殊学級においては、共遊、交流学习、散歩などにより、活動を通して心のつぶやきを感じ取る努力をされました。

(2) 保健室においては、子供を温かく受け入れ安心して話のできる雰囲気をつくり、心のつぶやきを感じ取ることに努められました。

(3) 教職員研修では、同和教育の研修会、被差別体験者との懇談会、家庭における同和教育の実践をすることで、同和問題を自らの問題としてとらえ、認識を深める努力をされました。

(4) 保護者啓発では、自己啓発を中核としてPTA同和教育研修会、学年部会、広報活動、学校参観、家庭訪問、意識調査活動による啓発に努められ、保護者の心のつぶやきの把握に努め、ともに学びながら、同和問題について語り合う関係づくりを目指し努力されました。

今後も同和問題に対する認識を深め、展望をもって、語りかけ、語り合う中で同和問題についての不安や悩みを取り除く研究を継続されることを期待しております。